



# 中高生とともに差別と闘う

## 「やってやるうじゃないか」

吉成タダシ



「とても愛している」からこそ

卒業式の「別れの言葉」は、一人約二〇〇字、三〇秒を基本にしています。事前に原稿も書いて持たせていましたから、いくら長引いても半時間もあれば終わる予定でした。ですが、実際には熱を帯びた時間は延々と続き、一時間経ったころになって、ようやく最後の生徒にマイクが渡ったのです。

「この三年間、私は先生や仲間からたくさんのお話を教えられました。先生からは学ぶことの大切さ、そして仲間からはたくさんのお話を聞いて、怒ったり、泣いたり、笑ったりして、一つになる大切さを教えられました。そしてあつという間にこの日が来てしまいました。以前は早く卒業したいと思うこともありましたが、いざ卒業となると、まだ卒業したくない、先生や仲間と少しでも長く過ごしたいと思うようになりまし

た。この中学校とお別れするのは寂しいけれど、今までの思い出を心にしまつて、これからは頑張りたいと思います。

長い時間でしたが、みなさん、私たちの『別れの言葉』を聞いてくださりありがとうございます。でも、これは私たちがこの中学校を、とても愛しているということです。それを分かっていただけたら嬉しいと思います。本当にありがとうございます。

最後のくだりは、彼が即興で考えた一言でした。たかが中学生、されど中学生。恐れ入りました。実際、学級担任として大幅に時間が長引い

ている状況を申し訳なく感じていた私からすれば、「すまん、ありがとうございます」しかありませんでした。

そして感動の卒業式の数時間後、あの大地震は起こりました。

怒髪天を衝く

「あの震災を忘れないでください」卒業式から、東日本大震災から、約一年が経ったころに岩手県の先生から聞かされた言葉でした。もちろん忘れるはずありません。あのとき映し出されたテレビ画面に背筋が凍りつき、声にならない呻き声をあげ続けていたのですから。だからといって、今の自分が何ができるのか。そう思い悶々としていたころ、ある出版社から本の出版のお誘いをいただきました。いわゆる駄目元で、書き溜めていた原稿を出版社に持ち込みました。なかには、部落問題をテーマにした小説、「SEASONS」もありました。

一ヶ月後、出版社から、原稿と一緒に手紙が送られてきました。長々と書かれた作品の講評の最後は、こう締めくくられていました。

「本作品の全国流通に関しては、差別部落問題といった、誤解を受けられることも多い重いテーマを扱った作品であるだけに、結論として弊社からの出版は難しいという意見で一致するところとなりました」

頭からサーッと血の気が引いていくのと同時に、それに抗して頭に向かって猛烈な勢いで血が逆流するような感覚になりました。

「出版社やメディアがそんななか

ら、いつまで経ってもこの問題がオープンにならず解決していかないんだ！」

「怒髪天を衝く」、私は猛烈に怒りました。

何を今さら！

それから更に一ヶ月後、私は陸前高田駅があつた場所に立っていました。岩手県に行く機会があつたので、レンタカーで沿岸部を巡ることにしました。車のナビに従って辿り着いた場所は、確かに陸前高田駅前だったので、そこには何もありませんでした。いえ、がれきの山や被害に遭った建物、仮設住宅はあるし、トラックや重機は忙しなく行き来していますから、何もないわけではな

いのですが、「何もない」感覚に陥ってしまったのです。陸前高田から大船渡、釜石、大槌と、一人で海岸線を巡るのですが、何でもないので、ひとりだけで涙がこぼれていました。

誰に何を言われるわけでもないのに、何とも言いようのない気持ちに襲われ、自然に涙ぐんでしまうのです。

岩手に出発する数日前、またしてもあの出版社から電話がありました。

「あの作品は審査を通りませんでした。が、別に他の作品があればぜひ」

実は、猛烈に怒つたあと、文句の一筆でも送りつけてやろうかとも考えました。が、そんなことにエネルギーを費やすことすらバカらしく思え、(どうせならエネルギーは有益なことに使いたい)と、忘れかけていたところでの電話だったので。

(何を今さら！ どの面さげて！)

感情的になる自分を抑え、そつけない返答をしていたのです。

やってやるうじゃないか

そんな自分と、一人旅をする自分。

「あの震災を忘れないでください」の一言。そして、当時問題になっていた、県外に避難した福島県の被災者へのいわれなき差別。

「生まれで受ける差別は部落差別だけじゃない。これまで闘ってきた先人から、自分はいったい何を学んできたのか。怒りをぶちまけたところで何の解決にもつながらない。今、自分にできることは……」

十数年前、高校生友の会のメンバーがバンドを組んで大切に思いを込めて歌っていた、ザ・ブルーハーツの「青空」のメロディが、静かに頭に流れてきました。

「生まれた所や皮膚や目の色でいつたいこの僕の何がわかるというのだろう」

あのころ、部落差別への思いを、精一杯の思いを、この歌に乗せて繰り返して歌い続けたフレーズ。いろんな思いのなかでつながっていくようでした。

「やってやるうじゃないか」

私なりの宣戦布告でした。部落差別でなくとも、別の形で世の中のおかしさを訴えてやろう。誰の胸の内にもある大切な故郷が心ない一言で否定されることのおかしさを描いてみよう。

それから私は、新しい自分への挑戦を始めたのです。

(次号「ペットボトル・マジック」)